

2013.2.5

慶應義塾大学法学部政治学科

塩原良和研究会

桂 竜馬

「宗教」から「神話」へ

社会学。社会変動。多文化共生。対話。ポジショナリティ。マイノリティ。外国につながる子供たち。近年めまぐるしく変容を見せつつある社会や人々について学習し行動する塩原良和研究会。そんな環境の中で私が取り組みたい研究のキーワードは「宗教」だ。私はまず宗教と社会学に関連する書籍の研究から始めた。

<先行研究の整理>

井上, 順. (2002). 宗教社会学のすすめ. 東京: 丸善.

この文献では、日本や世界において宗教というものがどういう状態にあるか、人々が宗教をどうとらえているかなどを紹介しつつ、宗教社会学という分野の紹介を兼ねて宗教的観点から社会の構造を研究しようとしている。

そのなかで印象的だった記述のひとつに、ひとつの宗教の研究に関するフレームワークが、異なった対象宗教にもあてはまるような研究のケースもあるという記述があった。文献内で紹介されているのは、キリスト教に関する宗教的な役割が、他の宗教の役割と重複することもあるというものだった。その記述では、ひとつの文化圏で培われた宗教社会的なものの見方は、他の宗教文化圏にも適用可能なことが多いという内容が記されており、例えば、キリスト教における教会の役割は、イスラム教ではモスクが、仏教であれば寺院が果たしていたり、牧師や神父の役割をヒンドゥー教では司祭が、仏教では僧侶が果たしていたりといった内容が紹介されている。

以上のような記述を読み、このような切り口から研究を進めることも有効ではないかと考えるに至った。

私の研究内容としては、ゼミに入る以前のイメージとしては、上記で取り上げたような複数の宗教の要素を比較し、その中で独自の視点から共通点や差異を探そうと考えていた。しかしその後、ゼミを通じて一年間勉強し、全くバックグラウンドの異なるふたつの宗教を同じ土俵で比較することが、果たして有効なのだろうか、という疑問に行きついた。この文献を読む以前の私の考えは、いくつかの宗教を比較するよりは、ひとつの宗教を深

掘りしてその内部で様々な役割や仮説を見つけ出していけばいいのではないかというものであったのだが、この文献にて宗教社会学の現場にて実際にそういう研究方法が用いられているということを知り、こういった研究方法を自分のなかで排除する前に、もう一度しっかりと調べてみる必要があるのではないかと感じた。比較研究しているような文献や論文を調べた後、それでも違和感を覚えるようであればひとつの宗教に集中する方法にしたいし、もし比較に対して自分が納得できる新たな視点があるのであれば、そういった方法も用いながら研究を進めたいと考えるようになった。

その一方で、この文献内においても、近年の宗教社会的な研究ではマクロな視点から様々な要素を包括的に見ようとするものよりも、ひとつの対象に長期間密着したり深掘りしたりする方法が主流になってきていると記述されていた。

いずれにせよ、塩原ゼミで培った自分の考え方にそぐわないような研究方法は用いたくないので、まずはどういった研究報告の内容になるのかについてイメージを沸かすことができるように、様々な文献に触れていきたい。

また、今回の文献では日本国内の宗教の実態に関して印象的な記述が記載されていた。宗教色が非常に弱く、クリスマスとお正月を両方楽しむような世界でも独特な文化を持った日本という国だが、果たして日本という社会、日本人という人種は、宗教に対して寛容であるのかどうか、という視点だった。

確かに日本ではいくつかの宗教的要素が習合したケースが多く見られ、宗教という概念に対してはフレキシブルな考えを持っているのではないかという印象は受ける。

しかし、本書においては、そういった日本人が宗教に対して寛容であるというイメージも、本質的にはとても限定的で縛られている宗教に対するものの見方の実情があるという指摘がされていた。

日本人は文化として、自分たちの生活に影響をもたらさないものや考え方にかんしては比較的寛容になる傾向が強い。今まで存在していたものが守られるのであれば、その外部でなにか異なった文化の存在があったとしてもあまり気にしない。その一方で、自分たちの共同体の文化や「しきたり」とずれたり、それを壊したりするような存在には警戒心を抱くことが多いという。仮に新しく外部からやってきた宗教が自分たちの今まで培っていた文化や習わしを崩すものであれば、それを排除しようとする強い運動は起こりやすいという。日本人は宗教に対して寛容であるというイメージが強い一方で、実は視点を変えてみると、ひとつの見えないルールに則って複数の宗教的伝統が組み込まれているだけであるという考え方もできるのだ、とこの文献を通じて勉強することができた。

そういったなかで、「自覚的信仰としての宗教」と「習俗としての宗教」という概念も非常に興味深かった。日本においては「自覚的信仰としての宗教」、つまり私はキリスト教で

す、私は仏教ですといった形でひとりひとりが自分の信仰する宗教を強く自覚しているケースは少ない。しかし、伝統的宗教の考え方の一部が、習俗として本人の考え方の一部になっているというケースは非常に多い。例えば、死後の世界の存在であるとか、霊の存在や輪廻の概念など、その発想が生まれた直接の宗教を信仰していなくても、一部の考え方を信じるという事例が紹介されていた。

「自覚的信仰としての宗教」は、教会や寺院が継承を果たしてきたのに対し、「習俗としての宗教」は共同体や家が継承してきた。さらに、今ではマスメディアという存在が一度に多くの人々の意識に習俗を根付かせるということもできるようになり、宗教に関する自覚的信仰や習俗が著しく変容していく過程にあるのかもしれない。

<神話>

マルコム・デイ著；山崎正浩訳(2011). 図説ギリシア・ローマ神話人物記：絵画と家系図で描く100人の物語. 大阪：創元社

宗教というキーワードでその多様性に基づく差異や影響、変容などについて研究を進めていたが、宗教という無限の形が存在する概念を、どこかにボーダーラインを設けて括り、その特徴や性質などを論じようと考えていた従来の自分の発想に対して、研究を進めるにつれて抵抗感を抱くようになってきた。

宗教といってもその概念には明確な定義はなく、差異や変容を論じようとしてもその多様性は無限に存在する。あるグループを括り、「このグループはこういう性質がある」「このグループとこのグループはこういう違いがある」などと論じるのは、ひとつのグループ内に存在する僅かだがとても重要な個性や多様性をむりやり押し殺してしまうのではないかと感じた。書籍を通じて、たとえばキリスト教ならキリスト教の、仏教なら仏教の概要や歴史を学ぶことはできるが、実際に生身の人間に会ってその人にその人自身の信仰の話の聞けば、もちろんすべてが教科書どおりであるわけではない。ひとりひとりに独自のバックグラウンドがあって、その人なりの考えや捉え方があって、人に触れ合えば触れ合うほど、人の数だけ宗教は存在するのかもしれない、ということ強く実感した。

多様性を尊重し、個性やアイデンティティを抑圧から護るという塩原ゼミの基本姿勢に立ち返れば、従来私が取り組もうとしていた方法では限界を感じるようになった。

そこで可能性を見出したのが、神話であった。

宗教は人間一人ひとりの中に宿るものであるが、神話はひとつの定まった形で存在する

ものであり、その性質を論じてもなにかの存在を否定することにはつながりにくい。宗教というくくりで考えていたときは、「この特徴はこういうことが言えるかもしれない！」と思っても、「いや、こういう立場の人はこう考えるかもしれない、一概には言えないな・・・」といった具合に、視点の多さ故に自分がすべての事実を包括した何かひとつの主張をすることがとても困難であった。しかし神話は、形を変えない。人によってその解釈に差が出てくるかもしれないが、物語自体の内容は定まったままずっと存在している。変な言い方をすれば、神話を論じることで抱く「誰も傷付けない感」が自分にはすごくしっくりきた。

方向性としては、特定の神話について論じたり、数種類の神話に基づいて論じてみたりするのも考えられる。特に現在自分の中で大きく考えているのは、神話もたらしている現代社会への影響や投影についてだ。数千年も前に作り上げられた神話が、今もなお語り継がれ人々の間で享受されているという事実には壮大さや感動を覚えると同時に人類のロマンを感じる。神話の中に潜む普遍的ななにかを探し出し、それが現代でどう生きながらえているのか、私自身としては強く興味を抱く内容である。

<聖書>

Herrmann, Siegfried、Klaiber, Walter 著、泉、治典・山本、尚子訳(2000).*聖書ガイドブック・聖書全巻の成立と内容*. 東京:教文官

中村、芳子(2010). *新版 3日でわかる聖書*. 東京:ダイヤモンド社

「神話」というテーマを中心に卒論を進めていきたいという思いから、まずは聖書の内容について勉強しようと思いつき、これらの著書を読むに至った。

聖書自体はキリスト教徒の信仰における大切な存在だが、その中で登場する神話性を帯びた説話や物語は、キリスト教徒だけではなく宗教の枠を超え世界中の人々にひとつの物語として親しまれている現状がある。キリスト教徒でなくとも、「アダムとイブ」や「ノアの方舟」の存在は知っているだろう。旧約聖書に記された古代のエピソードや新約聖書に見られるイエスキリストをめぐる話などから、現代に通ずる部分があるものを研究したい。

旧約聖書には、世界の成り立ちから西暦 400 年頃までの歴史や、その過程に起こった（とされる）できごとについて記されているが、その内容を改めて読んでみると、主張や正しい教えと同じくらい、それに背き掟を破る存在が多いと感じた。前述した有名な「アダムとイブ」や「ノアの方舟」も人間が神に背いたことから人間が神の裁きを受ける話である。

また、数多く登場するイスラエル民族の指導者たちや預言者たちのなかでも、サウルやヨナは神の意に反した行いをしたことで災いに遭う。こういった説話がなぜ多く、そして強調されて描かれているかと考えると、いつの時代でも人に何か特定の価値観を説明する際には、その対抗概念を説明することが一番手っ取り早くてわかりやすいのではないのだろうかと考えた。反面教師ほど人間の危機感をあおり自己変革をもたらしやすいものはないのかもしれない。そして、こういった掟破りと共に登場するのが善良な存在、もしくは改心する対象者である。「ノア方舟」では、神（創主）を忘れた全人類に対して、唯一創主に従う無垢な人間ノアが登場する。そして創主によって人類は滅ぼされ、ノアとその方舟に乗っていた家族や動物だけが助かる。ヨナ書に登場する預言者ヨナも、創主の命令に逆らった結果、巨大な魚に丸呑みにされる。胃の中で反省し、改心して祈りを捧げると魚はヨナを陸地に吐き出す。正しい行いと間違っただけの行いを極端に描写することで、信仰を深めさせたり布教を進めたりするにあたって、聖書を読む人間に単純なくらいわかりやすくメッセージを伝える狙いがあったのではないかと考える。現代に比べて情報量が圧倒的に少ない紀元前などの世界においても、身近な日常生活を舞台に繰り広げられるストーリーは想像し易いがために理解も早いのではないだろうか。読者視線に立った脚本構成になっている、という聖書の性質もひとつ言えるかもしれない。

このような手法は現代でも多く用いられていると感じる。ひとつ思い浮かぶのは、テレビや雑誌などにおける宣伝だ。例えば進研〇ミなどの教材販売の宣伝では、学校生活で部活や勉強が思うようにいかない主人公が登場する。そんな主人公に宣伝側の商品を渡すと、不思議なくらい成績が上がり部活でも活躍できる、といった具合である。また、消臭・殺菌スプレーの宣伝では、普段普通に生活しては気づくことはまずないようなハウスダストや悪臭のものの存在を新たな情報として受け手に伝える。新たな情報に不安や不満を植えつけられた受け手はメーカーの術中に陥り、気づいたら小売店へ走り商品を手に取ってしまっているのである。これらは、自分たちが相手に植え付けたいアイデアがあれば、その反対や対抗する状況や存在を誇張して受け手に伝える。そして自分たちが売り出す商品を持ってすれば、そんなあなたも救われますよ、と言わんばかりに売りつける。これはまさしく旧約聖書に記されたいくつもの反面教師的ストーリーと同じ効果を持ったものではないかと感じる。ネガティブな状況を提示し、そのカウンターカルチャーのような形で自分たちの価値観を刷り込ませる。そういう側面から見れば、僕には聖書と進研〇ミの広告は全く同じものに見える。

<仏教>

瓜生中著(2011). **仏教入門：インドから日本まで**. 東京：大法輪閣

ひろさちや著(2000). *釈迦とイエス*. 東京：新潮社

聖書の研究と並行して、仏教の基本的な概要やその神話性についても研究を進めている。

まだ細部まで詳しく研究できていないわけではないが、概要を掴み直感的に抱いた感想は、構造的にはキリスト教や他の世界宗教と共通する部分は大きいかもしれない、ということである。信仰するブッダがいて、聖書のようなまとまった啓典はないが仏や聖者の教えであるお経があり、利他主義（キリスト教では隣人愛）を重んじて行動する。そして、脇から生まれたり、生まれてすぐ歩いて言葉を発したりなど、神話性を帯びた釈迦にまつわるストーリーが存在する。信仰する対象やその内容は違えど、人間が根源的に宗教に求めるものは、どの文化でもどんな人種でも共通したものがあるのかもしれない。

仏教に関して、先日本格的にその道を歩もうとしている友人に、お寺案内を兼ねて色々な話を伺う機会があった。

その友人は、仏教から派生したひとつの宗派で、修行や勉強を積み僧の資格をとろうと励んでいる。そんな彼に、社会見学くらいの気持ちでいいから一度お寺に来てみないか、と誘われた。卒論のテーマがテーマであった私は興味を抱き、お寺を訪れ、中を巡りながら彼にその宗教についての話を聞くことができた。

彼の話聞いて思ったことや感じたことはいくつかあったが、日本において熱心に宗教活動を行っていくことに関しての世間体的な肩身の狭さがあるという事実は改めて実感した。日本では宗教に馴染みが浅い分、堂々と活動するにはどうしても代償が伴うという。彼も自分がそういった宗教の勉強をしているなどといった事実は公言していない。どうしても身構えられてしまったり怖がられてしまったりして、良い印象を持たれることはほとんどないからだという。こういった日本の現状は、今後多種多様な人や文化を共存させていく上では和らげなければいけないステレオタイプであると思う。内容も知らないのに名前を聞いただけで警戒してしまうようでは、世界中で人びとの大きな心の支えとなっている宗教というものが日本で存在しにくくなってしまふ。確かに日本では、宗教団体と言うと地下鉄サリン事件を起こしたオウム真理教など近年ではマイナスなイメージの出来事が少なくない。しかしそれが宗教法人のすべてではなく、彼らが慈善事業や寄付などで社会に貢献をもたらしていることもまた事実で、その辺は公平性をもって世の中の人にあるのままの正しい姿を伝えていくことが必要になっていくのではないだろうか。

また、彼の話聞いていてもうひとつ感じたのは、強い信仰の裏には何か強烈な実体験がある、ということである。私は彼に、「似たような宗教は他にもあるけど、ここでなければいけないのか」と質問した。彼はここでなければならぬ、と即答した。まだその理由を言葉にして明確に説明することはできないらしいが、その強い想いは過去の体験の積み

重ねからきていると教えてくれた。彼が人生の節目で迷ったり悩んだりした時はいつも、そのお寺に行き、そこの人々に教えをもらうことで救われてきたという。ただ自分が体験した気持ちを言葉にするのは大変で、一番難しい部分でもあると言う。自分が救われた過去の体験を強く信じ、周りの人々にもそのような衝撃的な体験をしてほしくて彼は自分の思いを伝えようと必死に努めている。

彼の話を通じてなおさら深めたのは、やはり宗教は人の数だけある、という考えだった。彼の属する宗派でも一人ひとり違ったバックグラウンドがあるし、そうすると当然それぞれの考えには微妙な差が生じてくる。それらをどこかで線を引きグループにして論じようと考えていたもとのアプローチの仕方は、やはり私にはできないと改めて実感した。一人ひとりの独立した想いを尊重したいし、何かの存在を否定するようなことはしたくない。とするならばやはり個人に根付いたストーリーや、形を変えない過去の神話などで論じるべきなのではないか、と自分の思いを確認する出来事となった。

上記のように宗教というものに対していくつかの側面からアプローチを試みたが、やはり考えとして強固となったのは「宗教というのは動的なもので常に変わり続けている」ということと「人の数だけ宗教がある」といことだ。

こういった考えのもとに自分が卒業制作をどのように作るかと考えると二つの方法が想定された。それは、①熱心な仏教の友人のようなケースに見られる人それぞれの中の宗教をインタビューなどを通じて表現し、できるならそれを複数人を対象に行う。②人々の中でずっと変わらない唯一に近い宗教的なものである神話。それを、多文化共生というテーマをもとに書いたらどうなるか。

今回私は、後者の神話を作成する方向に進みたいと考える。

卒業制作

神話×多文化共生

リンゴの歌

塩原良和研究会4期 桂竜馬

目次

- ・プロローグ
- ・I
- ・II
- ・III
- ・IV
- ・V
- ・エピローグ

プロローグ

遙か昔の、まだこの世に光も空も大地もなかったころのこと。四輪の車が陸の上を走るようになるよりも、内陸の民が万里の長城の施工にとりかかるよりも、ルビコン川のほとりで賽が投げられるよりもさらに昔の話。

ティタン神族の一人、クロノスは大きな鎌を手持っていた。母ガイアの復讐を遂げるため、彼は実の父であるウラノスに刃を向けようとしているのだった。

ガイアとウラノスは多くの子供をもうけた。後にティタン神族と呼ばれる12柱の神々を生み落としたが、クロノスはその末っ子だった。また、ガイアはさらに何柱かの異形な神々も産んだ。彼らはほんの少し腕を多く持っていたり、ほんの少し首を多く持っていたりした。しかし、彼らの父であるウラノスはそれが許せなかった。その少し変わった姿かたちを忌み嫌ったウラノスは自らの子である彼ら異形な神々を奈落タルタロスへ幽閉してしまった。彼らを他の子供同様愛していた母ガイアはひどく悲しんだ。悲しみは憎しみへ変わり、ガイアは子供たちに対して父ウラノスへの復讐を要求する。子供たちはみな父を畏怖したが、クロノスは違った。彼は母に復讐を誓い、彼女から預かった巨大な鎌を持ってその時を待った。

夜になり、ウラノスがガイアの上に覆いかぶさるようにして深い眠りについた時。クロノスは彼に近づき、持っていた鎌を振りかざし父ウラノスの男根を切り落とした。自らの息子にそのような仕打ちを受けたウラノスはその場を逃げるように去っていくが、去り際に一言だけ言い残した。

「お前も、やがてお前の息子に復讐される時が来るであろう」

切り落とされたウラノスの一部は海へと落ち、そこから白い泡が湧き出た。その泡は流れ流され地中海のとある島へ行きつく。そして島にたどり着いた時、その泡は神をも唸らせる美貌を有した女神アプロディテになっていた。

瀬戸内海に面した、本州の淵にある静かな土地。その海岸沿いにある、木造二階建ての一軒家。断続的な自然災害に鍛えられ、古くも逞しい家屋が堂々とたたずんでいた。その家には、二人の親子が暮らしていた。父の名は、イザナギ。息子の名は、スサノオ。

父イザナギは、土木関係の仕事に従事していた。近代化が進む時代の中で、都心部に土地が足りなくなったがために、この地に埋立地をつくってなにかしらのものを建てるらしい。そこに何が建つのか、イザナギはわからなかった。彼の仕事は、ただそこに土地をつくることだった。いつ終わるかわからないような果てしない仕事だが、スサノオが物心ついたころには既に同じ職についていた。

スサノオは、腕白で繊細な少年だった。格闘家のように大柄で、ソース系と呼ばれそうな濃い顔と鋭い目が特徴的な乱暴な少年だった。どれくらい乱暴かというと、昔同級生にリコーダーの真ん中のパーツをきりたんぽと入れ替えられたことが原因で殴り合いのけんかをしたり、ジャイアンのような乱暴な性格から学校でスサイアンというあだ名をつけられたりしていたくらい乱暴だった。かと思えばたまに、怖い夢を見て起きたから寝られなれと言って深夜の居間で座っていたり、自分のコンプレックスである水分の無いパサパサとした髪の毛を友達にいじられたからといって家で感傷に浸っていたりする繊細な一面も見せた。感受性が激しく、本能の赴くままに、感情が導くままに行動してはトラブルにくわしていた。そんなスサノオは、いつもどこか寂しそうな目をしていた。

スサノオには、生まれた時から母親がいなかった。イザナギの話によると、スサノオが生まれた時には既に彼の母は亡くなっていたらしい。それでは自分はどうやって生まれたのか、とスサノオが聞いても、天候のように気が変わりやすいイザナギからそれ以上の答えが返ってくることはなかった。父からは曖昧な情報を受け取ることが多かった。どうやらスサノオには兄弟もいるらしいが、何らかの理由で今はそれぞれ別々の暮らしを営んでいるらしい。正確な場所も分からないが、どうやら海を越えた向こう側の世界に住んでいるらしい。なぜ自分たちと一緒に住まないのか、とスサノオが聞いても、女性のように気が変わりやすいイザナギからそれ以上の答えが返ってくることはなかった。

自分の出生の不確実性、周囲で起こり続ける感情を揺さぶる出来事、そんな環境におかれた正体がわからない自分という存在、波のように定まらないいくつもの要素が相まって、彼はいつしか乱暴者という枠から抜け出せないようになっていた。彼は自分でも、なぜ自分がそのように周りにあるものを乱し続けるのかわからなかった。わからないまま、彼は乱し続けた。彼は行くべき部屋を探していたが、四方にはドアが開け放たれたまま点在していて、そのドアを通り抜けてたどり着いた先の新たな部屋にも、明け放たれたドアが四方の壁に散らばっていた。そのドアは、壁よりもずっと壁のようだった。

イチヨウとダウンジャケットが匂を迎え、テレビ局が番組改編期を迎えた肌寒い初秋のある日、スサノオの荒ぶる感情は突然、收拾がつかなくなるほど高ぶってしまった。

スサノオの心は水のような寂しさに襲われた。突然涙があふれ出した。なぜそのようなことが起こっているのか自分でもわからない。しかしふつふつと、すこしずつ感情が形を帯びてきたことに彼は気づいた。スサノオは言った。

「お母さんに会いたい」

その一言がこの荒ぶる感情のすべてではないが、一部を担っていることは間違いなかった。右往左往するスサノオのいくつもの感情の中で、はっきりと言葉で表現することができるのはこのひとつだけだった。辞書に載っているもの、載っていないもの、言葉で定義されているもの、そうでないもの、多様で複雑な感情たちが彼の内部をかきみだした。母に会いたくなる寂寞は、そのうちの一人だった。

スサノオは泣いた。泣き続けた。腕白さに定評のあるスサノオの泣き声は、同じく定評を与えなくなるようなものだった。

イザナギが二階の寝室から降りてきた。スサノオに泣いている理由を尋ねた。

「お母さんに会いたい」

スサノオは答えた。

普段はつかみどころのないようなイザナギだが、泣き叫ぶスサノオを見てこの時ばかりは急に人が変わったように激怒した。スサノオを抑えつけ、力づくで泣くのを止めようとした。しかしスサノオは泣きながら訴え続けた。満たされない愛情が叫ぶ声を、彼の口は代弁し続けた。スサノオは訊いた。

「お母さんはどこにいるの。教えてよ、お父さん」

いつもと同じ質問も、この日はまったく違った響き方をした。それに共鳴するかのようにも、もしくは反発するかのように、イザナギの対応もいつもとは違った。

「これ以上そんな理由で泣き続けるなら、いますぐこの家を出ていきなさい」

そう言い放つイザナギの表情も、複雑な感情が入り混じる心境が浮き出るような表情だった。怒り。真っ先に伝わってくる激しい怒り。その奥に、霞んで見て取れる確かな悲しみ。森の奥深くを彷徨うような、深くも幽かな悲しみ。

今まで言われたことのない言葉を浴びせられ、スサノオはどうしていいかわからなくなった。ただ、この場は去らなければいけないだろうなということとは本能的に感じた。この限られた空間に父と二人、熾烈な感情をぶつけ合いつづけてもらちがあかない。感情のかけ口を探し回るかのように、その大きな体で去り際に椅子を蹴り飛ばし、本棚をひっくり返し、スサノオは外へ飛び出した。

外へ放り出されたスサノオは、あたまの中が真っ白だった。目の前には海が広がり、まっすぐな水平線が視界を二分していた。あたまは真っ白なのに、心の中は濁された灰色で塗り埋められていた。なにかしたいのに、なにをしたらいいかわからない。電車に乗った

のに、どこで降りればいいかわからない。スサノオは目的地を決める必要があった。自分が今把握できるものを整理してみた。しかしいくら考えても、どれだけ探しても、たしかなものはない。しか出てこなかった。母に会いたい、その想いしか、いまはとらえることができなかった。しかし死んだ母にどうやって会いにいけばいいのだろう、スサノオは再び思考停止に陥る寸前にまでなったが、そこから救いの枝道を見つけた。そうだ、兄弟を探しにいこう。生きているかもあやしい母親に会いに行くより、少なくとも海の向こうで生きていくという手掛かりが兄弟にはある。名前も顔もわからない兄弟なのだから、仮に見つけたとしても判別はつかない。でも、それでもいい。自分の血のつながった人間がいるとされる向こうの土地は、自分にとってなにか新しいものを得る場所になるかもしれない。この海の向こうに、自分の寂しさを解決する答えが、定まりきらない自己を知る手掛かりがあるのかもしれない。期待を乗せた右足と、不安を乗せた左足が、交互に動き始めた。

神秘のヴェールにつつまれる、四国と名のつけられた不思議な島。瀬戸大橋という象徴的な導線が動かざること山の如くあぐらをかいていたが、その無理やり感に満ちた鉄の塊では島の持つ不思議で神聖な空間に穴をあけることはできず、四国は依然としてその独特な空間の中で中立的に年月を積み重ねていた。

そのような場所で育ったアプロディテもまた、生まれ故郷を真似するかのように自分という空間の主張が強い少女だった。バランス良くパーツがちりばめられたその顔はこの社会では美貌と呼ばれ、高圧的で攻撃的な態度をよしとさせてしまうほど彼女のスレンダーなボディとシャープな顔は美しかった。いわゆる私の強い女として周囲から一目置かれる彼女は、本能的で利己的な人間だった。自分が欲しいと思ったものは手に入れなければ気が済まなかった。コマーシャルで宣伝される化粧品、クラスでの地位や権力、時には親友の彼氏でさえも。好きな人の奪い合いで友人とけんかになったことなどいくらでもあった。同時に3人の男を好きになり、その全員に同時に告白したこともあった。とにかく自分が欲しいと思ったものは、手段を選ばず奪取しにいった。

アプロディテにとって大事なものは、二つ。自分を認めてもらうこと、そして自分が傷つけないこと。それ以外のものは自分とは関係ないので排除する。ひとつ象徴的なエピソードがある。昔、アプロディテがよく声をかける男の子がいた。彼は運動が得意で、地元のスッカークラブでエースを張るくらいの実力を持ち、性格も明るくみんなから親しまれる人気者だった。自分も光を浴びたいと強く欲するアプロディテは、よく彼の近くへ行つては女の武器をふりかざすかのように話しかけていた。そんな中、ある日その男の子は交通事故に遭ってしまった。自転車に乗っていたところを車にはねられ、片足に後遺症が残ってしまったためにサッカーも辞めることになった。それでもその子は毎日明るく、以前と変わらない態度で学校に通っていたが、アプロディテがその男の子に話しかけることはもうなかった。たまに彼の方からアプロディテに話しかけてきた時もぞんざいに扱い、ある日学校の近くにあるスイセンの花畑が荒らされていたという件でその男の子が身に覚えのない容疑をかけられていた時も、彼の無実を知っていながらアプロディテは「私は知りません」と一蹴した。自分に無関係なこと、自分の利益にならないことをするのは、彼女の信条に反するのだ。

端正な顔立ちをしているから男子からはなんだかんだ注目されるが、同性からの支持は皆無に等しい、そんな少女だった。とにかく欲望の絶対量が人より格段に大きかったが、いくら欲しいものを手に入れても、人のものを奪っても、自分の欲求は満たされなかった。底に穴のあいた欲求という袋にものを詰め込み続けたが、いつになってもそれが満杯になることはなかった。幼いころは本能に従ってただただ詰め込み続けたが、理性が育ち考える力が芽生え始めた頃から、この終わりが見えない欲求とのいちごっこに懐疑心を抱くようになった。やがて果てしなく欲し続ける自分にも、不安と疑いを持ち始めるようにな

った。

アプロディテは、親戚の家で育った少女だった。彼女の実の両親はどうしているかはわからないが、生まれて間もなく、彼女一人が逃れるように今の家にたどり着いたようだ。親戚はアプロディテに良くしてくれたが、直接の血縁関係がないことを知ってしまった。せいか、アプロディテにとっての完全な居場所とはなっていない。彼女は家庭の中で満たされないから、家庭の外で満たされようと思えるようになった。みんなに自分のことを見てほしい。みんなに自分のことを認めてほしい。そういった想いは次第に偏った方向にエスカレートしていき、居場所がないあまり、満たされたいと欲するあまり、自分のことを認めない人は悪い、私は変わる必要がない、そう思うようになっていった。自分が変わらなないと決めた途端、彼女はとも楽になった。自分は今のままでなにも悪くないのだ。私を否定する人は、相手にしなければいいのだ。容姿もきれいだから人も寄ってくるし、今の私を認めてくれる人だけ私は生きていけばいいのだ。そう考えるようになった。途端彼女はとも気が楽になった。人の言動によって自分が傷つく心配がなくなった。その楽さに気をとられて、自分を認めてくれる人が少しずつ少なくなっていくことも、もとと感じづらかった居場所や信頼関係のような気持ちをさらに感じなくなっていく過程も、変わろうとすることをやめてしまったアプロディテが気づくことはなかった。

アプロディテには、唯一落ち着く場所があった。彼女が住んでいる家の少し離れたところで、彼女は一本の林檎の木を育てていた。毎年花を咲かせ、果実を実らせ、その果実が切り落とされても同じ過程を経てまた来年の同じ季節には真っ赤な果実をぶらさげている。林檎が日々その姿をすこしずつ変えていくのを見ると、なぜだかはわからないが自分が普段の日常で満たされないなにかを、少しだけ埋めてくれるような気がした。自分に媚を売ってくる使い勝手のいい友人という時よりも、色仕掛けで落とした町で一番の色男と一緒にいる時よりも、この林檎の木の前に立っている時間の方がアプロディテには大事だった。ただ残念なことに、林檎は言葉を発してはくれない。無口な林檎だけでは満たされないアプロディテは、不変という鎧をまとって今日も認める者を拒まず認めざる者を追わずに生活を続けた。自分の袋の中身がどんどん空っぽに近づいていくのを感じつつも、そこから逃避しながら。

海を渡り、なんだか異次元の空間のように思えるような気持ちにさせられる四国という魔力を帯びた島に上陸したスサノオは歩き続けていた。ファミリーマートを通り過ぎ、三色の武器を使い分け絶対的服従を強要する信号が牛耳る横断歩道を渡り、三菱ふそうのトラックがウーファーのようなエンジン音を配り歩きながら公道を通り過ぎて行った。あてもなく足を動かし続けるスサノオは、無意識に自分の過去を振り返っていた。思い起こせば、幼いころからわがままを言っただけ、自分の思い通りにいかないものは力に任せて形を変えてきた。振り返るといつも自分の行動の原動力は自分自身で、それをまかりとおすためにずいぶん周囲の色々なものを乱してきたような気がした。ただ今のスサノオにはそれがなかに意味するのか、まだよくわからなかった。過去の出来事は歴史の教科書で学んだメソポタミア文明の繁栄やD2型機事件と同じように、彼にとってはただの事実でしかなかった。

彼の眼差しに常に宿る僅かな寂しさが物語るかのように、スサノオは常にどこか満たされていない気持ちがあった。今止まることなく動いている彼の両足は、脳の指示や運動神経などといった身体の仕組みとは関係なく、現代医学をもってしても体のどこにあるかすらも判明していない感情とやらによって動かされているようだった。足りないものを補うために、正体のわからないなにかを求めてスサノオの精神は無心で動き続けていた。

そして歩き続けたスサノオは、一本の木の前にたどり着いた。

スサノオは一本の木の前にたどり着く。

その木は真つ赤な丸い物体をいくつも吊り下げている。林檎だ。その血のように赤い果実を見ていると、途端に胸が騒ぎだす。混沌とした心の中にマドラーが差し込まれ、砂糖やミルクや得体の知れない液体が注ぎ込まれた後にぐちゃぐちゃにかきまぜられるような感覚に陥る。動悸が激しくなり、視界がぼやけていく。心を乱されながらもスサノオは耐える。定まらぬ焦点と霞む視界を水平に戻し、もう一度林檎の木の方をよく見ると一人の少女が立っているのが見える。真つ先に飛び込んでくるのが、その印象的な目だ。その印象的な眼差しは、見覚えはないが、心当たりはある。

その少女の方も、見たことのない少年が通りに立ってこちらを見ていることに気づく。そしてその少年の顔面に埋め込まれた、見覚えはなくても心当たりのある眼差しが真つ先に目に入る。そして直感的に、その心当たりの正体に彼女は気づく。

自分もきつと、こんな目をしているのだろう。

攻撃的でありながら、どこか寂しそうな目。彼女は突然何も考えられなくなる。今まで正しいと思ってきたもの、絶対だと信じてきたものが、ゆっくりと確実にひとつひとつ崩れ落ちていくのがわかる。初めて見るものなのに、その少年を見ているとなんだかとても悲しくかわいそうに思えて、そういった感情が沸き出たと思ったらその感情の矛先は知らぬ間に自分に向いていることに気づく。自分はこう見えていたのか、根拠のない確信が、いまだかつて彼女の中に芽生えなかった新たな感情を生む。それがなんなのか、彼女にもよくわからない。しかし唯一宿る強い想いは、彼を放っておいてはいけないということだ。彼と一緒にいないと、この感情や確信の正体は何なのか一生わからないような気がする。彼女は少年に尋ねる。

「あなた、名前は」

急に話しかけられた少年は慌て、しどろもどろしながらも答える。

「スサノオ」

そして聞き返す。

「君の名前は」

少女は答える。

「アプロディテ」

アプロディテはスサノオに歩み寄る。そして話しかける。

「私、あなたのことを知りたい。あなたはだれ。なぜここにいるの。なぜそんな目をしているの」

スサノオはアプロディテを見る。彼女の目は、なんだかさつき見た印象と少し違うように思えた、気のせいかもしれないのだけど。しかし、その少女の姿の背景に映える真つ赤な林檎たちが再び視界に入ってくると、前はマドラーだったものが今度は電動ミキサーが

心に突っ込まれてぐちゃぐちゃにされているような気がして、幼いころ友達とけんかした時でも不思議な衝動に駆られ泣いて家を飛び出した時でも感じたことのない感情がスサノオの体内に充滿する。彼は居ても立ってもいられなくなる。どうしたらいいかわからないスサノオは、その象徴的な木までふらふらと近づいて、優美にぶらさがる赤い果実たちを引き裂くようにもぎ取り始める。彼をそうさせる気持ちは何なのか、彼にもよくわからない。怒り、憎悪、悲しみ、恐怖、どれでもあり、どれでもない。ただ複雑で巨大な感情が彼を動かし続ける。

アプロディテはそれをただ見ている。あんなに大事にしていた林檎なのに、それがひとつずつもぎ取られていくのを止めずに見ている。我ながら不思議な現象だ、きっと林檎よりも大切なものが、自分には見つかったのだろう。

すると突然、そこに隣人が数人通りかかる。ひたすら実をもぎとる見知らぬ男を見て、当然の流れで声をかける。

「おい、なにをやっている」

スサノオは反応する気配を見せない。隣人たちが抑えにかかろうとしたその時、アプロディテが言い放つ。

「待って下さい。彼には、私が頼んだのです。今年の林檎は出来が悪く、放っておいたら木そのものが悪くなってしまうので、そうなる前に私が彼に取ってもらうよう頼みました」

なんなのだろう、この感覚は。良く分からないけど、彼女の心中は穏やかだ。

その一言を聞いて、スサノオも動きを止める。自分は何か取り返しのことかをしてしまったのではないかというような気持ちと、非の無い相手にかばわれるという初めての経験とが入り混じって、彼は木から離れる。そしてスサノオは何も言葉を発しないうちに、来た道をもう一度戻っていく。少女は何かを受け入れたかのように、その小さくなつていく後ろ姿をずっと眺めている。

雨が降り始めていた。その勢いは指数関数のように増しつづけ、やがて耳に入ってくる音は雨と陸の衝突音だけとなった。スサノオの歩みは止まらない。

四国へ来てよかった。四国になんか来るのではなかった。二つの真理が二律背反と化してスサノオを左右から押しつぶす。

答えは見つかった。自分が探していたものはここにあった。彼が探していたものは、探さなくなる自分だった。探しものなのだから当たり前といえども当たり前なのだけど、自分が満たされなかったのは、自分のものを探していたからだだったのかもしれない。同じ目をしたあの少女と出会い、自分を見るように相手を見て初めて、自分から目を離さなければならぬと気づいた。そうしたら、わけもなく欲し続ける自分ももうどこかへ消えていた。

しかし失ったものはもっと大きかった。いや、自分は何も失っていない。とてつもなく大きなものを、失わせてしまった。その結果自分は答えを得たが、答えを得た自分にとつてその結果はとても大きな喪失だった。

体に打ち付ける象徴的な雨が、自分の過去を、自分の考えをひとつひとつ流し去っていく。

ふと視線を上げ周りを見渡すと、そこにある景色は全く違ったものに見えた。物理的には同じだけれども、景色としては全く違う。急に今まで気にならなかつた色んなものになり始めた。あの畑の野菜はこの雨でだめになってしまわないだろうか、あの古い民家の中に誰か住んでいるとしたらこの雨で困っていないだろうか。友人たちは今何をしているのだろうか、父は今ひとりでどうしているのだろうか。

歩き続け、海岸まで辿り着いたスサノオは瀬戸大橋を渡り戻ろうとしていた。遠くから列車が近づいてくる音も聞こえる。海を渡って帰ろうかと再び歩き始めたその時、海岸に近い少し先の線路の脇になにやら白い影が見えた。シルエットから判断するにどうやら狐のようだ。豪雨ではつきりとは目視できず、しっぽが何本もあるように見えるくらいにぼんやりとしか見えない。しかしその足元にある赤い異物ははつきりと認識できる。その狐は血を流しているようだ。列車が近付いてきているにもかかわらず動こうとしない、動けないのだろうか。スサノオの心はざわついた。すると、ガタンと大きな音がした。雨に足を滑らせてか、列車が脱線していた。回送という文字を誇示しながら進みつづけるその列車は、まるで意図的であるかのように動けない狐をめがけ猛スピードで進んでいった。スサノオは走り出していた。

迷える少年が傷ついた狐を拾い抱え、暴走する列車の前を寸前のところで通過すると、その列車はそのまま直進し海へ向かっていった。爆発音のような大きな鳴き声とともに、八両の鉄の塊は大きな水しぶきをあげて海底へ沈んでいった。その水面に現れた無数の気泡は、なにかそこから新しいものが生まれるのではないかという思わせぶりを与えるくらい、美しく温かい泡だった。

エピソード

イザナギは走っていた。かつては愛し合い、多くのものを共にこの世に産み落とした相手から、今は必死に逃げていた。

火の神ヒノカグツチを生んだとき、愛するイザナミは自らの肉体をその生んだばかりの我が子に焼かれて死んでしまう。死んだイザナミを追い掛けて、イザナギは黄泉の国へと向かう。やっとの思いでイザナミを見つけ、地上へ帰ろうと誘う。イザナミは答える。

「黄泉の国の食べ物を食べた私はもうここから出られません。でもあなたがそう仰るなら、黄泉の国の神に相談してみます。ただしその間は、決して私を見ないでください」

しかし、いくら待ってもイザナミは現れない。しびれをきらしたイザナギはイザナミを見に行ってしまった。そこには幾多もの雷神に全身を蝕まれ、見るも無残な姿に成り果ててしまったイザナミがいた。取り憑かれた様に彼女は言った。

「よくも私に恥をかかせたな」

黄泉の国の軍勢とともに追いかけてくるイザナミにつかまらないために、イザナギは逃げた。つかまつたら自分もここに残らなければならない。そうなってしまったら、まだまだ未完成のままの地上の国が未完成のままになってしまう。自分は戻って世界を作らなければならぬ。イザナギは走り、遂に地上まで逃げ延び黄泉の国の入り口を大きな石で塞いだ。

黄泉の国から帰ってきたイザナギは、まつさきはその汚された体を洗った。すると、左目を洗った時にアマテラスが生まれ、右目を洗った時にツクヨミが生まれ、鼻を洗った時にスサノオが生まれた。

イザナギは彼らにこの世界を託すべく、それぞれに納めるものを与えた。アマテラスには天界を、ツクヨミには夜を、そしてスサノオには海を治めさせた。無数の海流が複雑に交錯し、ぶつかり合ってお互いに混ざり合い形を変える海。スサノオはそんな海を象徴するかのよう、終わることなくぶつかって傷ついて変わって生きていく。

参考文献

- 井上順『宗教社会学のすすめ』2002年、丸善
- 緒方惟章『古事記』2004年、勉誠出版
- 葛城山龍溪『スサノヲの真実』2006年、中央文化出版
- 鎌田東二『超訳古事記』2009年、ミシマ社
- 斎藤英喜『荒ぶるスサノヲ、七変化：八中世神話Vの世界』2012年、吉川弘文館
- 阪下圭八『日本神話入門：『古事記』をよむ』2003年、岩波書店
- ジェフリー・グリグスン著・沓掛良彦・榎本武文訳『愛の女神：アプロディテの姿を追って』1991年、書肆風の薔薇
- ジェームス・ボールドイン著・杉谷代水訳『ギリシャ神話』2011年、富山房企畫
- 『古事記の本：高天原の神々と古代天皇家の謎』2006年、学習研究社
- 松本孝芳『古事記のフローラ』2006年、海青社
- マルコム・デイ著・山崎正浩訳『図説ギリシア・ローマ神話人物記：絵画と家系図で描く100人の物語』2011年、創元社

リンゴの唄／並木路子

赤いリンゴは　口びるよめがし

だまってみている　青い空

リンゴはなんにも　いわなうけれど

リンゴの気持は　よくわかる

リンゴ可愛さや　可愛さやリンゴ

2013.2.5

慶應義塾大学法学部政治学科

塩原良和研究会

桂 竜馬

卒業制作「リンゴの唄」 解説

今回自分で神話を作成するに当たり、どのような構成にするかをまず考えた。

卒業制作の全体的な内容として、古来ほぼ変容することなく伝わってきた神話を現代風にアレンジし、多文化共生や対話といったキーワードにつながるメッセージを伝える、というテーマを持って取り組みたいと考えた。そこで、現代に伝わっている主要な神話になぞらえて、いくつかの神話を組み合わせることでそういったテーマを表現できないかと考えた。今回取り上げたのは日本神話に登場するスサノオとギリシア神話に登場するアプロディテ。

スサノオを取り上げた大きな理由は、彼が途中で大きく変容するからである。今回参考にした古事記においても、スサノオは序盤では悪役として描かれ数々の粗暴な言動が描写されるが、途中からは打って変わって正義のヒーロー的な一面を見せる。古事記においてはこの変容に関してのバックグラウンドや具体的なきっかけは描かれていないが、この変化のポイントで対話や共生につながる出来事を考えたいと思い、スサノオとそのストーリーを取り上げることにした。

アプロディテを取り上げた最大の理由は、ギリシア神話において彼女がとても本能的で極端な性質を持って描かれていたからであった。今回私が構想していたストーリーの大きなテーマとして「自分という軸で何事も考えていた人が相手を軸にして考えるようになる」というものがあり、アプロディテはまさにその変化する前の自分の欲望の思うがままに行動する人物像をわかりやすく表現しているものだと感じたため、登場人物として取り上げることにした。

ストーリーに関しては、古事記におけるスサノオをめぐる物語を踏襲して作ることにした。スサノオの物語が現代であったらどういう背景やストーリーになるのだろうか、と考える文章の至るところに2012年現代を思い起こさせるような比喻や言葉を意識的にちりばめた。例えば、直接的な表現で言えばⅠの第二段落で「近代化が進む時代の中で」というフレーズを入れたり、Ⅲで「ファミリーマート」や「三菱ふそう」といった産業社会のアイコン的な存在を入れたりすることで、これが昔ではなく今を舞台にしたものであると思ってもらうことで、読者により親和性や当事者意識を持って読んでもらいたいという意図があった。

アプロディテはギリシア神話において様々な説話が残されているが、私が調べた限りそ

れらはどれも独立したひとつひとつのエピソードだったため、そういったエピソードをアプロディテのキャラクター描写に活かそうと考えた。物語に登場する場所としては、古事記のスサノオをめぐるストーリーにおけるアマテラス大御神が登場する場面で登場させることとした。古事記においてもアマテラスに会う前と会った後でスサノオは変化を見せている。古事記ではアマテラスはなにも悪事を働かない善玉のキャラクターだが、今回ここに悪玉のアプロディテを配置することで、スサノオの独立的な変化ではなくアプロディテとスサノオという二人の登場人物の相互的な変化を描こうという狙いのもとに、この位置にアプロディテを登場させることにした。

ストーリーの中身の説明をすると、まずプロローグではアプロディテの誕生経緯を簡潔に描くことにした。ウラノスが自らの子を姿形が違うだけで否定したというエピソードを載せたのは、共生の障壁のひとつであると考えられる固定観念や先入観を象徴するものであると感じたためだ。また、唯一のセリフであるウラノスの「お前も、やがてお前の息子に復讐される時が来るであろう」という言葉は、憎しみの連鎖を表現する意図で入れたものであった。この世を自分の思い通りにしたいがあまり自らの子をもタルタロス（奈落）送りにしてしまうウラノス、そしてそのウラノスを成敗するも自分も息子をガイアの胎内に押し込めたために息子であるゼウスに討たれることとなるクロノス。自分という軸を押し通そうとする限り負の連鎖が続き、対話をしようとする姿勢には結びつかないということを訴える目的でこのセリフを入れた。しかし、ゼミ生と先生に先日読んでもらった際になかなか一文だけでは伝わらないのではないかという感触も得たのだが、迷いながらも引き続き載せたままとすることにした。

本章に入ると、まず物語の設定の説明から始めた。舞台とした瀬戸内海はイザナギとイザナミがいわゆる「国生み」を行った舞台であり、日本神話の象徴的な場面であることからこの場所を選んだ。イザナギが土木関係の仕事に就き埋立地をつくっているのもここに由来し、国生みで日本列島を産み落としたという部分を現代風なメタファーで言い表そうという狙いがあった。エピローグでもあるように古事記においてはイザナギがイザナミを振り払った後にスサノオが生まれるが、そこを現代的に変換するとなかなかの飛躍をうんでしまいそうであると判断したためオブラートに包み答えを出さないという選択をした。

スサノオの描写は私自信が古事記を読んで抱いた印象を、現代の感覚や言葉で表現してみようと意識した。エピソードも現代の学生がどこか親近感を抱きつつも神話の中にいるスサノオを崩さないように意識した。

古事記においてスサノオは母であるイザナミに会いたいと泣き叫ぶため地上を追い出されるが、乱暴ななかにあるそういったスサノオの繊細な一面にどこか放っておけないような、どうにかしてあげたくなるような人間性を感じた。彼が後にヒーロー的な描写に変化するのも、この「母に会いたい」という人を想う温かい心を最初から持っていたという種

まきが利いたストーリーであると感じた。私はフランツ・カフカの小説が好きで数冊読んだことがあるが、彼が一貫して描く不条理さのようなものは彼自身がチェコに住むユダヤ人というまさに外国にルーツをもつ人間として育ったことから「所属」を感じることに「アイデンティティ」につながると考えるところからくる部分もあった。そのように、スサノオも自分の母親という大切な「所属」あるいは「バックグラウンド」がわからないことによって不安定さが生まれてしまうのではないかと考えた。そういった不安定さをどうやって乗り越え変化していくかが今回の物語の大きなテーマの一つでもあった。

II章に入りアプロディテに関しての記述が始まるが、舞台に四国を選んだのはまずアプロディテの出生がキプロスという島国であったこと、さらに国生みの舞台である瀬戸内海に面しているということ、そして四国＝死国＝黄泉の国というメタファーでスサノオが求めている世界を表現したかった、という意図があつたことだった。

アプロディテに関しては自分の思い通りにするためには手段を選ばないような所謂同性に嫌われる女性をイメージし、具体的かつ極端なエピソードを交えて描写した。実際ギリシア神話においても色話がとても多いため、現代的に変換してなるべく現実的に描写するよう心がけた。エピソードの中で大事なのがサッカー部の男の子との話で、以前はどんなに輝いていても自分に利益がないと考えたらこの初期のアプロディテであつたら迷いもなく切り捨てるという性格を描くことが自分の中のポイントであつた。そんなアプロディテが後半で、自分の利益などとは関係なくスサノオのことをかばう、というところに彼女が変化する重要な対比を描こうという狙いがあつた。余談だが、エピソードに取り上げた花畑に咲くスイセン、花言葉は「うぬぼれ」「自己愛」「エゴイズム」だ。

アプロディテも神話では実の親ではない女神に育てられたと記述されているため、先述したようなスサノオの不条理さからくる不安定さを表現しようとした。

りんごという今回の物語の象徴的なアイテムの由来は、まずアプロディテの説話で「黄金の林檎事件」というトロイア戦争の発端となる事件があり、りんごがアプロディテに馴染みのあるものであつたということ、さらに古事記においてスサノオがアマテラスの畑を荒らす、それを再現するためになにかアプロディテが大事に栽培しているものを登場させたいという狙いがあつたためだ。アプロディテが林檎を見ていて安心するのは、自分が傷つかないために変わることをやめたアプロディテと、季節を追うごとに形を変えるりんごの対比を意図し、無意識に変わることを欲しているアプロディテを表現したかった。

そんなりんごがIV章に入ってスサノオの目に入った時、それはスサノオに「自分が変わろうとすること、相手を知ろうとすることで初めて人と対話を始める一歩が踏み出せる」ということをつきつける役割をもっていた。それを簡単には受け入れられないスサノオはその提示から逃げるためにりんごの木を荒らし始めるが、アプロディテのスサノオをかばう一言で気づき受け入れる。これはスサノオがアマテラスの畑を荒らす場面を踏襲してい

て、古事記ではアマテラスが一言かばうだけのシーンだが、自分本位だったアプロディテが変わるシーン、そしてスサノオがこの命題に気づくシーンとして重要な台詞として位置づけた。

V章は天界を追い出された後にヤマタノオロチを退治するスサノオのエピソードを踏襲したものだった。自分の考えが変わり新たな人生を歩み始めようとしたその一歩が他者を助けようとする行為であった。ここで登場する狐は中国神話に登場する「九尾の狐」をイメージして描いた。九尾の狐は殷の紂王を変えたように良くも悪くも「人を変える」象徴として描かれていた側面がある。ここではスサノオの良き変化を手助けするとともに、日本・ギリシアに加えて他の国の神話性も取り入れたいという狙いがあった。八両の電車は八つの頭を持つヤマタノオロチを連想してもらえるようにし、最後の水しぶきから生まれる泡はアプロディテの生まれた瞬間をなかば再現するようなかたちで二人の他者を想う温かい気持ちを言葉で表現する意図があった。

エピローグでスサノオの生い立ちを描写したのは、彼が海を司る神であるからということが大き。私の個人的なイメージではグローバル化して人や文化が入り混じる現代は「海」のようなイメージが強く、最後の段落で描いているように海流が入り混じる大海を司るスサノオは共生や対話というテーマに対して感覚的にすごくフィットする人物像であった。

途中で触れてきたようにこの物語で表現したかった最も大きなテーマは「自分中心に物事を考えていた二人が、他者を想い始めることで変化する」ということで、これはどちらか一方ではなく二人がお互いに作用しているという **Reflexive** な側面を、神話になぞらえる形で表現したかった。そういった私が感じた多文化共生へのキーが読者に伝われば嬉しい。